

## 171. 近江・山城の

### 凸帯文後半期の土器について

#### 1. はじめに

縄文晩期後半は九州から東海地域まで広範囲に分布する凸帯文土器を特徴とする時期であり、北部九州ではすでに弥生文化の諸要素が成立している。しかし近畿地方などでは、炭化米や榎痕土器の出土例はあるものの、いまだ弥生文化の諸要素は完備されていない。最近の研究では、弥生文化がいつ・どのような形で成立したかということが最も問題となっている。したがって弥生文化成立前夜の土器編年は増々細分化されている。

一方小地域色についてはほとんど論じられていないのが現状である。こうしたことを踏まえて本稿では、近江・山城の凸帯文土器、とくに二条凸帯文土器を取り上げて小地域色を抽出していきたい。

#### 2. 調整工程にみられる違いについて

凸帯文土器は、家根祥多氏によって滋賀里Ⅳ式→船橋式→長原式に分けられた<sup>①</sup>。さらに泉拓良氏が滋賀里Ⅳ式と船橋式の間口酒井期を設定する<sup>②</sup>など三あるいは四型式に細分されている。これらのうち、本稿で対象とする二条凸帯文土器は、船橋・長原式に当たる。

このような土器の細分化に対し、南博史氏は氏のいう第三期の中で、家根氏が長原式の典型例(第1図1・3・4)とするものは、河内地域の特徴的土器であるとした。また、口縁端部に接して凸帯を貼付けるものの、口縁端内面と凸帯上面の強いヨコナデのため凸帯が垂れ下がるもの(第1図2)は播磨から西摂に多い特色とした<sup>③</sup>。

これらの地域色は、凸帯形状という文様の要素に器形を加味した小地域色であるといえる。当然、近江・山城においても同様な小地域色をもつものと考えられる。これについては後で述べることとし、本節では、調整痕および調整工程の大きな違いをもつ二種類の土器について考えていく。

二条の刻目凸帯文土器を主体とする船橋式・長原式の深鉢には、多くの調整が存在する。指や板状工具・ヘラ状工具・皮などによるナデ、ヘラ・棒状工具によ

るミガキ、刷毛目、板・二枚貝などを代表とする各種条痕、ヘラ・板などによるケズリがある。

型式設定の基準となった大阪府大阪市長原遺跡<sup>④</sup>の土器群をみれば、その大半が口頸部を皮(?)などによる丁寧なナデ調整を行い、体部凸帯以下はケズリ調整を行っている(第1図3・4)。それに対して、近江・山城では、口頸部と体部を区別することなく、縦方向に一気に刷毛目調整するものがある(第1図5・7)。ここでは、前者の調整工程をもつ土器をⅠ類とし、後者をⅡ類とする。以下述べる時は、Ⅰ類・Ⅱ類として述べていく。

両調整工程とも、体部凸帯の貼付けはすべての調整が終了してから行われており、Ⅰ類が主体の大阪府藤井寺市船橋遺跡<sup>⑤</sup>・長原遺跡の土器は明らかに体部凸帯のない段階で意識的に調整を変化させている。とくに体部のケズリは基本的に下から上へ縦方向に行われ、体部凸帯付近では斜方向から水平方向に行われている。これは滋賀里Ⅲ式・Ⅳ式と共通することで、前段階の調整と調整工程を踏襲しているといえる。

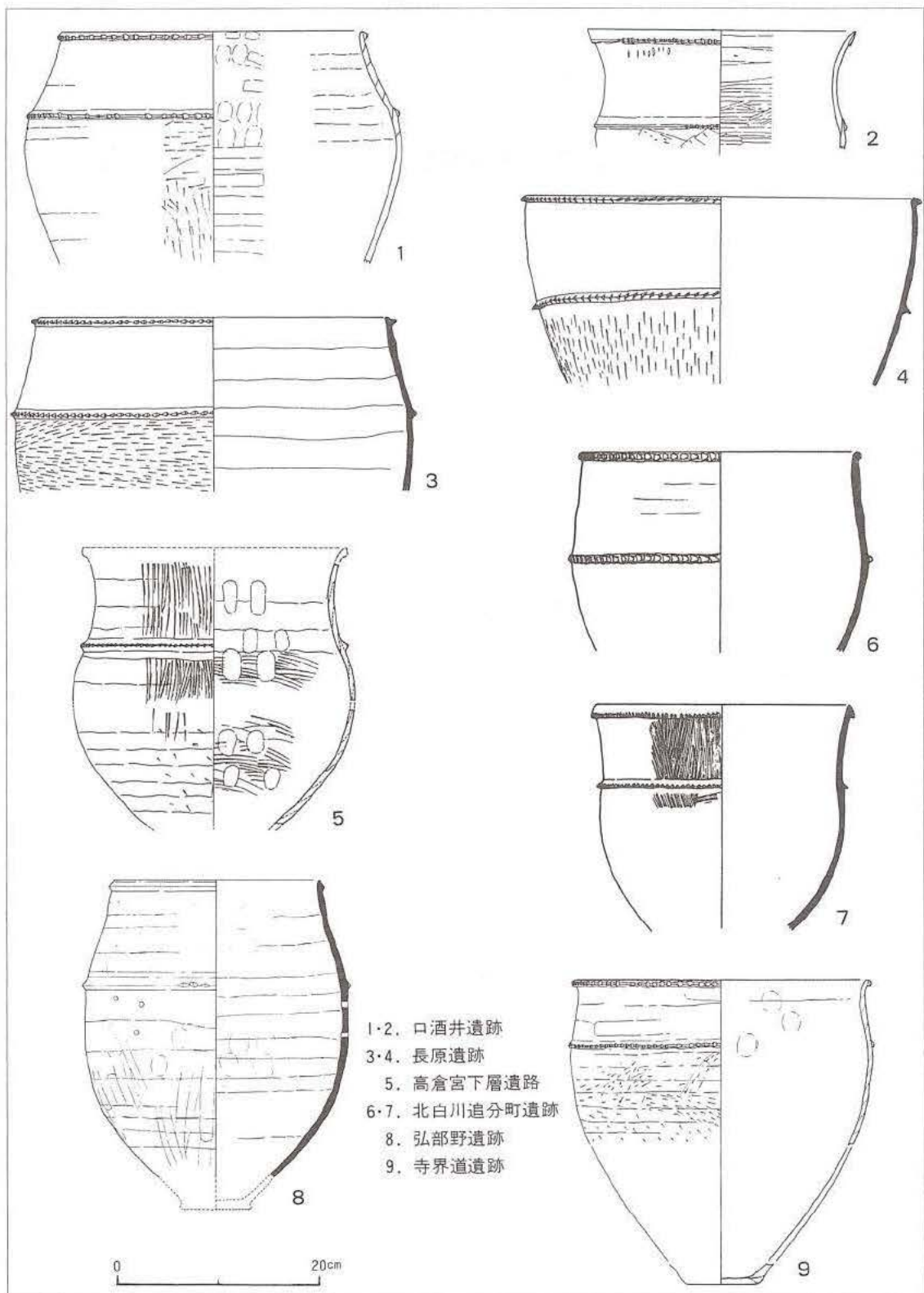
一方、Ⅱ類は刷毛目<sup>⑥</sup>という滋賀里Ⅲ・Ⅳ式にはなかった調整を用い、さらに肩部の意識を調整段階ではもたず、口縁部まで一気に調整しているなど前段階の調整工程を全く踏襲していない。そこでⅡ類が二条凸帯文成立とともに出現するのか、長原式に限定できるのかという問題がある。

Ⅱ類の中で口縁部凸帯まである土器では、凸帯は口縁に接して貼付けられており(第1図7)、家根氏編年の長原式に相当するものがほとんどである。しかし第1図5のように口縁部は欠くものの、体部が強く張り出し、口頸部が強くくびれる船橋式的な土器もある。したがって現状資料からは長原式のみにあるとは断定できない。但し、近江・山城の長原式段階の土器でも河内地域などで多くみられる口縁凸帯がかまぼこ形をするタイプの土器(第1図6)には、この調整工程のものはない。あくまでも近江・山城に多い口縁部凸帯が下向きの三角形になるタイプのもの(第1図7)のみに認められる。

工程Ⅱ類が近江・山城に分布するとしたが、具体的にⅠ類・Ⅱ類の分布をみていきたい。

#### 3. 各調整工程の分布

近畿地方の最も西に位置する播磨では、公表されて



- 1・2. 口酒井遺跡
- 3・4. 長原遺跡
- 5. 高倉宮下層遺跡
- 6・7. 北白川追分町遺跡
- 8. 弘部野遺跡
- 9. 寺界道遺跡

第1図 凸帯文土器実測図

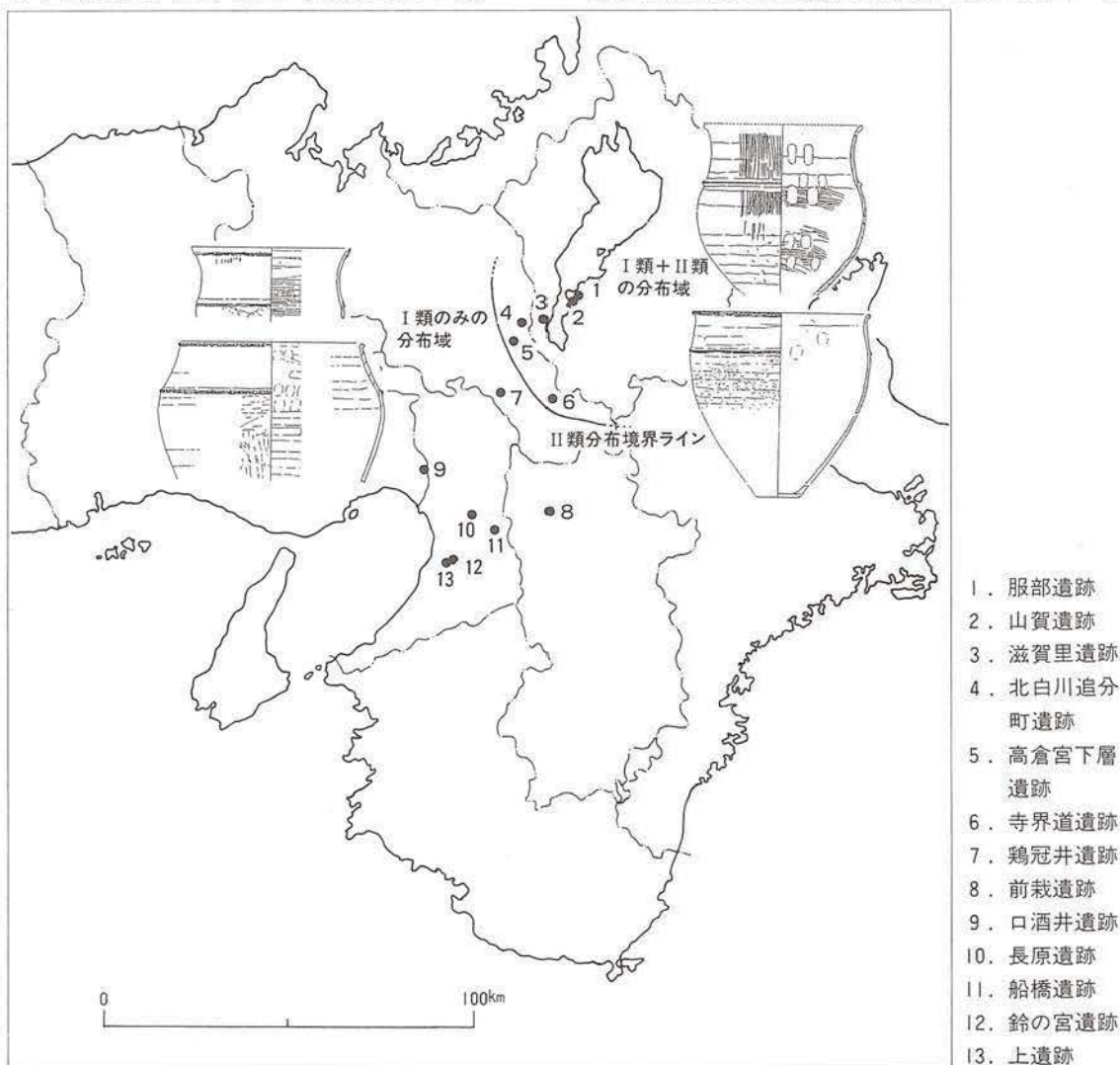
いる資料の中で体部下半まで明らかなのほとんどない。少ない資料をみれば、I類のみのものである。また、さらに西の岡山県百間川沢田遺跡<sup>(7)</sup>でも同様である。西摂の兵庫県伊丹市口酒井遺跡第11次調査の資料<sup>(8)</sup>では、明確に体部凸帯上下の調整痕がわかる例11点中すべてがI類である。この中には口頸部に横あるいは縦方向の板ナデ調整を行う土器があるが、基本的には体部と口頸部は別の調整である。対象とした11点には、いわゆる生駒西麓産の胎土をもつ河内系の土器（第1図1）や播磨系の垂れ下がり凸帯の土器（第1図2）などいろいろなタイプの土器が含まれている。

和泉地域では、大阪府堺市の石津川流域で良好な資料がみついている。その中の鈴の宮遺跡<sup>(11)</sup>・上遺跡<sup>(12)</sup>などはI類を基本としている。さらに河内地域の長原遺跡でも前掲のようにI類のみで構成されている。

大和地域では、全体がわかる土器が少ないため不明な点が多いが、基本的にはI類が主体のものである。奈良県天理市前栽遺跡<sup>(13)</sup>や明日香村稲淵ムカダ遺跡<sup>(14)</sup>の一条凸帯文土器をみれば、調整痕は多様化されているものの、刷毛目調整は認められない。

山城に目を移せば、淀川の西岸に位置する乙訓地域と鴨川・宇治川流域の地域では、やや状況を異にしている。京都府向日市鶏冠井遺跡<sup>(15)</sup>の凸帯文土器は体部凸帯の上下が確実にわかる資料5点中すべてI類である。鴨川扇状地上の京都市北白川追分町遺跡<sup>(16)</sup>・高倉宮下層遺跡<sup>(17)</sup>（第1図5）は共にI類とII類の両方が存在する。

近江をみれば、湖西南部の大津市滋賀里遺跡<sup>(18)</sup>では、I類がほとんどで明確なII類をみることはできない。湖南の服部遺跡<sup>(19)</sup>にはII類が比較的多く認められている。



第2図 主要遺跡の分布と調整工程による小地域色概念図

以上、各地域において大雑把にみてきたが、西摂・和泉・河内・山城の一部(乙訓)・大和などの地域では、二条凸帯文土器は基本的にI類の調整工程のみで構成されている。これに対して、山城・近江では数量的な違いはあるものの、前段階の調整と調整工程を受けつぐI類と地域的特色であるII類がセットとなっている(第2図)。さらにII類でも刷毛目以外の板ナデ、板条痕、ヘラナデなどの調整をもつ土器を含めると数量的に増加傾向を示す。湖南の守山市山賀遺跡では刷毛目状の調整痕ではないが、II類が半数を占めているという<sup>19)</sup>。

#### 4. 凸帯や器形による近江・山城の地域色について

現在、近江・山城の凸帯文土器は比較的多く出土しているにもかかわらず、土器の細部にわたる基礎的データの取れる遺跡が少なく。そこで、近江・山城の凸帯文土器の凸帯形状や器形について若干気づいたことについて述べていく。

器形からみれば、前述のI類分布地域に位置する口酒井遺跡・長原遺跡・鈴の宮遺跡などの長原式段階の土器は、二条凸帯文土器の割合が多く、体部付近に最大径があり、内湾気味に立ち上がる器形のもの(第1図1・3)と口縁部に最大径をもち、ゆるやかに内湾気味に立ち上がる器形のもの(第1図4)が基本となる。

II類とI類がセットとして分布する近江・山城では、体部凸帯のかわりに肩部に段のある土器などもあり、I類のみ分布する地域に比べてバラエティーに富む。また山城では、典型的な長原式の器形や凸帯をもつ土器は口縁部に最大径をもつ土器(第1図6・9)に限られるようである。

凸帯の形状から近江・山城の特徴として挙げられるのは、刻目がなく、凸帯高が高く、形状が三角形を呈するもの(第1図8)や下向きの凸帯が貼付けられるもの(第1図7)などである。前者は今津町弘部野遺跡<sup>10)</sup>や服部遺跡で認められ、それらの土器は口縁周を何分割かにする部分に2、3個の刻目を施している。

二条凸帯文土器、とくに長原式段階の器形・凸帯形状などから近江・山城の特徴的土器について簡単に述べたが、現状ではこれらの土器が各遺跡で必ず存在するのか、どれぐらいの比率であるのかはわからない。補足的になるが、近江・山城の船橋・長原式期の土器は、器形的にバラエティーに富んでおり、河内や摂津に比べて一条凸帯文の土器が多いことも特色として指摘できる。

#### 5. おわりに

近江・山城の一部とその他の地域では、調整工程II類を含む点で大きな小地域色が存在することが明らかになった。しかし本稿では、これらの小地域色のもつ

意味については言及できなかった。これについては別稿にて述べることにする。また器形や凸帯形状についても若干の小地域色を認めることはできるものの、各遺跡ごとの基礎的データの不足より不明な点が多い。したがってこれらの属性による地域色は今後の資料の増加に伴って明確になるであろう。

(中村 健二)

#### 注

- ① 家根祥多 「近畿地方の土器」(『縄文文化の研究』4:縄文土器II)1981.  
同「縄文土器から弥生土器へ」(『縄文から弥生へ』)1982.
- ② 泉拓良 「縄文と弥生の間に一稲作の起源と時代の画期一」(『歴史手帖』14巻4号)1986.
- ③ 南博史 「大阪湾周辺地域における縄文晩期凸帯文土器の変遷—口酒井遺跡第11次調査を中心として—」(『朱雀』第2集)1989.
- ④ 永島暉臣慎・家根祥多他 『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告II』1982.  
松尾信裕他 『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告III』1983.
- ⑤ 田辺昭三他 『船橋』II、1958.
- ⑥ 厳密な意味で刷毛目類似の板条痕も含まれる。
- ⑦ 岡田博他 『百間川長谷遺跡・沢田遺跡2』1985.
- ⑧ 南博史編 『伊丹市口酒井遺跡—第11次発掘調査報告書—』1988.
- ⑨ 北野俊明 『鈴の宮III』1988.
- ⑩ 森井貞雄 『<sup>かしの</sup>上遺跡発掘調査概要』1985.
- ⑪ 泉武 『前栽遺跡—縄文時代晩期遺跡の調査—』1984.
- ⑫ 鐵英記 「稲淵ムカンダ遺跡発掘調査概報」(『関西大学考古学研究紀要』5)1987.
- ⑬ 山中章他 「長岡京跡左京82次発掘調査概報」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第10集)1983.
- ⑭ 京都大学埋蔵文化財センター 『北白川追分町遺跡の発掘調査—京都大学B D33区発掘調査現地説明会資料—』1987.
- ⑮ 南博史他 「第2部 平安京高倉宮下層遺跡の調査」『平安京左京三条四坊四町』1988.
- ⑯ 田辺昭三編 『湖西線関係遺跡調査報告書』1973.
- ⑰ 大橋信弥・山崎秀二両氏の御厚意で実見した。
- ⑱ 小竹森直子 『新守山川改修工事関連遺跡発掘調査概要I』1986.
- ⑲ 葛原秀雄・中村健二 『弘部野遺跡発掘調査概要報告書』1988.  
参考文献:南博史・中村健二「寺界道遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集1987.